

重要文化財 阿蘇家文書 (34巻36冊)

工藤 敬一

今回は、九州の観応擾乱の発端となる足利直冬^{ただふゆ}の九州下向関係の史料3点を紹介する。

一般に足利尊氏と弟直義の対立抗争と理解されている貞和5年(1349)から文和元年(1352)にいたるいわゆる観応の擾乱は、直接的には比較的守旧的な関東の有力武士を支持勢力とする足利直義と、畿内近国の新興武士の支持を得て、より伝統否定的な立場に立つ尊氏の執事高師直^{たかしのり}の対立から始まる。尊氏は勢力維持のためには師直を支持せざるを得ず、尊氏・直義の兄弟の対立抗争となり、遂には師直・直義ともに命を失ない、実力的にはほとんど無力化していた南朝方が、一時は京都を回復するまでになったのであった。

直冬は尊氏の実子であったが、父にうとまれ不遇な少年時代を送った。直義はこれに同情し尊氏にとりなし、左兵衛佐に補して大将として起用させ、さらに自分の養子とした。そして、貞和5年(1349)4月、備中・備後・安芸・周防・長門・出雲・因幡・伯耆の八箇国の支配権をもつ長門探題に補し、備中鞆の浦に滞在させた。その後京都では直義と尊氏・師直の対立はいよいよ激化し、遂に直義の失脚となり、8月末直冬も師直方の兵の襲撃を受ける。直冬は四国にのがれ、さらに九州に落ちる。直冬の九州下向を主導したのは肥後の有力武士河尻幸俊である。「大平記」によると9月13日に河尻幸俊の舟で肥後に落ちたという。ここに取りあげた史料〔三〕からも直冬の没落先が「肥後国河尻津」であったことが分る。

河尻氏は巖峨源氏の末裔といい、肥後国飽田郡河尻(現熊本市川尻町)を本貫とするいわゆる国御家人であり、鎌倉期に河尻大渡の地に寒巖義尹が開いた大慈寺に寺地を寄進した河尻泰明は著名である。河尻氏は鎌倉中期以降、北条氏と密接な関係をもって抬頭し、南北朝期にも大むね武家方に属した。〔一〕の「肥後守」も菊池氏惣領の南朝方の肥後守に対抗して、直冬の承認を得て称したものであったろう。

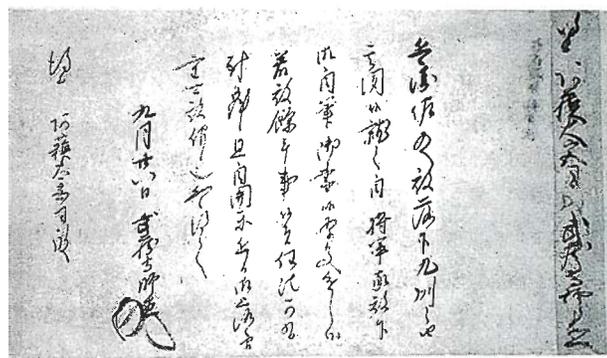
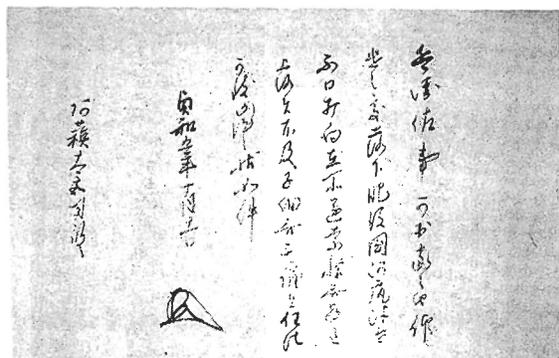
直冬は將軍の名代として下向したとあって、しきりに九州の軍士を催し、9月18日には阿蘇氏惣領の大宮司惟時もこれに応じた。直冬はこれを謝して20日

に阿蘇大明神に願文を捧げ、河尻幸俊もまた〔一〕の願文を奉納したのである。天下静謐・四海泰平、それに両殿(尊氏・直義)の息災延命、殊に直冬の所願成就と自分の所望満足・息災安穩・寿命長遠を立願の志趣としているが、直冬による阿蘇庄の寄進と自分の拜領分一所の寄進を約しているように、期待するところは直冬と自己の意図の達成(勢力伸長)である。立願の志趣にあえて「両殿」と記し、対立関係にある尊氏の息災延命も加えられているのは一見不思議に思われるが、將軍の名代を標榜して、九州武士の叫合を計ろうとする直冬の意図からすれば当然のことであったといえる。幸俊の願文は、このような直冬の目的にそうものであった。本文書は立願文という性質からみて、幸俊の自筆である可能性が高い。下部に一部焼失があるのが惜しまれる。

直冬の九州到着のニュースが伝わると、尊氏・師直は直ちにその追討を命ずる。〔二〕・〔三〕はともにそれを示す文書である。いずれも宛先は阿蘇大宮司惟時である。阿蘇氏は当時肥後最大の勢力であり、就中惟時はその惣領として、中央では南朝方、北朝方(尊氏派・直義派ともに)をとわず、きわめて高く評価されていたのである。〔二〕は師直が、直冬処分について、尊氏が関東から下した自筆状の案文(写し)を送る、もし手に余るようなら、法に任せて処置されたい(誅伐してよい)と惟時に命じたもので、近く関東から尊氏が上洛したらまた重ねて命令があるはずである、といている。〔三〕は、その尊氏上洛後に出された御判御教書である。尊氏は直冬が出家上洛することを希望し、惟時の働きかけを期待していたのである。写真で分るように〔二〕・〔三〕は同筆であり、この間ずっと師直のもとに居た右筆の執筆であったと判断される。このことは、この間の直冬追討そのものが師直の意図にそったものであったことをはしなくも示しているように思われる。〔二〕にあえて尊氏自筆状の案文を送ると書いたのも、却って師直の策謀を示している感がある。実際直冬追捕の命令を受けた多くの武士達は容易にこれに従わず、逆に直冬の支持勢力は拡大していった。特に北部九州に大きな力をもつ少貳頼尚は、尊氏が九

州の総官として置いた九州探題一色範氏を目の上のコブとしていたので、これを好機として直冬方につき、さらに肥前の深堀氏や松浦党、肥後の詫磨氏など続々とこれに加わった。こうして九州は、直冬の九州下向に先立って肥後に入った征西將軍宮（懷良親王）を戴

く菊池氏を中心とする官方、それに探題方、そして佐殿（直冬）方の三派てい立の独特の政治状況を迎え、その抗争の中からやがて征西府の覇権が確立されてゆく。（文学部教授 国史学）



〔三〕 將軍家 足利 尊氏 御判御教書
（直冬）
 兵衛佐事、可出家之由仰遣之處、
 落下肥後國河尻津云々、
 不日打向在所、遂素懷、無爲令上洛者、
 不及子細、無其儀者、
 任法可致沙汰之狀如件、
 貞和五年十月十一日 （羅氏）
（大） 惟時
 阿蘇太官司殿

〔二〕 高師直書狀
（折封ウハ書）
 〔謹上 阿蘇太官司殿 武藏守師直〕
（直冬）
 兵衛佐殿被落下九州之由、其聞候、就之、
（羅氏）
 自 將軍家被下御自筆御書候、案文進之候、
 若被餘手事候者、任法可有計沙汰候、
 且自關東近日御上洛之間、重可被仰候也、
 恐々謹言、
（貞和五年）
 九月廿八日 武藏守師直 （花押）
 謹上 阿蘇太官司殿
（宇治惟時）
（大）

世界—書物—図書館

井原 健

神は自然・人間・聖書という三冊の書物を書いた、ということになっていたりする。これはつまりこの世は何でもかんでも本なんだと言い切っていることになる。聖書ならまだしも自然や人間まで〈書物〉というメタファーで一括してしまうのは、一定の手順を踏んで読み解かれるという点では同じであると考えられていたからだ。それらを生み出すに当たって神が刻み込んでおいた書跡を苦勞して解読し、わかる者にしかわからない真理を導き出すという共通の作業。自然〔世界〕（マクロコスモス）も人間（ミクロコスモス）もすべて書物のように読まれ、理解される。今となつては多少奇異に思える一方で思わずこのたとえに惹かれて

しまうところもあるのは、それが過去何百年の間メタファーとして共有されていたという事実と現在のわれわれがもう取り戻すことのできないノスタルジックな喪失感を抱くからかも知れない。

歴史をさかのぼるとこういった考えはヨーロッパではかなり古くから存在する。特に世界＝書物という〈リーベル・ムンディ〉の観念は、ダンテ『神曲』中の「この宇宙に紙片のように散らばったものが愛によって一巻の書物に綴り合わされている」という言葉に代表されるように中世において一般的になり、「自然もしくは世界という書物を読むために、黄色くなった羊皮紙の埃を払った」ルネサンス以降も盛んに論じられる

東光原

熊本大学附属図書館報



Kumamoto University Library Bulletin, No.5, June 1993

目次

- シリーズ熊本大学附属図書館蔵特殊資料紹介 4
 - 重要文化財 阿蘇家文書 (34巻36冊)
- 世界-書物-図書館
- 化学Jリーグキックオフ
- サッカーボール状分子に関する論文数の推移

〔一〕河尻幸俊願文
敬白
阿蘇大明神御齋前立願事
一 可有御寄進阿蘇庄事
一 可奉寄進以幸俊拜預所内所領一所事
右、志趣者、為天下靜謐、四海泰平、兩^(殿)御息災延命、
^(足利直冬)殊兵衛佐殿御心中所願^(成)就圓滿、次幸俊所望満足、
息災安穩、壽^(命)長遠之、所奉立願之狀如件、敬白、
貞和五年九月廿日 肥後守幸俊^(河尻) 敬白
^(花押)



足利直冬の九州下向関係文書（阿蘇家文書より）本文に解説